

編集後記

本 会を創立時から支えてこられた方がまた一人亡くなりました。古浦敏生先生は常に温厚実直な態度で、突っ走り気味の若い学生達を見守ってくださいました。25年前広島大学でのN.コンドソプロス博士のギリシャ方言ミニ・セミナーでもイタリア南部のギリシャ語方言について専門的な質問をされていたお姿が忘れられません。個人的なことですが、学部時代は別の学科だった私が言語学科の授業を聴講する際もご自身の学生達と何ら代わることなく接してくださいました。その年はヘシオドス「神統記」の講読でしたが、百腕巨人ヘカトンケイルの奇怪な説明に、なんだかよくわからんね、と苦笑されていたのが印象に残っています。はったりをおっしゃらない、分からないことは不明とする自然体の方でした。私が大学院の頃に書いた、抽象的でひねくれた論文の冒頭部分を明晰で風通しのよい日本語に直してくださいったり、Ελληνικά や Αθηνά といった貴重な雑誌を図書館に入れてくださいたりと、思い出は数限りなく浮かんできます。

心よりご冥福をお祈りします。(橘)

海 外の化粧品サイトで Athens という名前の口紅を見つけました。各国の都市名が付けられたラインナップの中でとくに、ピンクベージュでマットな色が人気の商品とのこと。ふと、30年前に、「Color Atene (アテネ色) は、どんな色だと思いますか」と古浦敏生先生が学生たちに尋ねられたことを思い出しました。イタリア語の色彩語彙を研究するため、先生は、ローマの画材店を回っては色見本を苦心して集められたそうです。アテネ色は壁用塗料の名前で、建築業者による新しい命名であるというご説明は覚えているのですが、残念ながら肝心の色についての記憶は残っていません。

先生のエッセイ集（「イタリア語万華鏡」）にお菓子のティラミスと京都の「おたべ」の命名法を比べた文章があります。言語学的な視点で日常を観察し人が見落としがちな事例を見つけ出す勘所、飄々とした文体で平易にしかも面白く記述する術はまさに古浦先生の独壇場だと思います。

古浦先生、ギリシャにも ΦΑΓΕ（「食べて！」）という乳製品メーカーの社名がありますよと、お伝えできないのが残念でしかたありません。(佐藤)